
Angel Beats!

雨宮歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats！

【Nコード】

N7762Y

【作者名】

雨宮歩

【あらすじ】

死後の世界。そこは生きているときに遣り残したこと、未練を残して死んでいった者が生きる世界。

というわけでこの話は原作の数年前、「死んだ世界戦線」が作られたところの話から音無君の登場までをオリジナルに作っていく予定でしたがいろいろやりたくなったので、音無君を登場させて消していきます。

なお、音無君登場以後は、なるべくアニメ版の設定にそって書い

ていくつもりです。

原作崩壊が大好きでない方は見ないことをお勧めいたします。

すべての始まり

あのときまではいいお姉ちゃんであいられた。その自信もあった。だけど……

「中村、おい中村。起きないか、授業中だぞ」

私は教師の声で目が覚める。確か今は……国語の授業だった気がする。担当教師の朗読が始まってすぐ寝ちゃったんだったつけ。それに、あの夢……ひどく見覚えはあるんだけど……記憶にもやがかったかのように、思い出すことができないや。

「なんだ、顔色が悪いな。おい遊佐、中村を保健室まで連れて行ってやれ」

「わかりました」

遊佐と呼ばれた少女は機械的にそれだけ答えると、私を引っ張って教室の外へ出た。そして教室から少し歩いたところで彼女がいきなり口を開いた。

「ところで、あなたの名前は？　話をまったく聞いていませんでしたので、わからないのですが」

「え、じゃあどうしてわかりましたなんて答えられたのよ」

「あの場の空気がそうだったからです。空気を読んだというやつです」

「…ふうあまり聞いてもしようがなさそうね。私の名前は中村ゆりよ。呼び方は何でもいいわ。ところで…遊佐さんだったっけ？ あなたの下の名前は？」

「私は遊佐とだけ読んでいただければ結構です。私には生きていたころの記憶がありませんから、そこまでしかわからないのです」

「そう。それは…って今なんていった？　なんかありえないことを聞いた気がするんだけど」

「？　私はただ、生きていたころの記憶があるなんて、ゆりっぺさんはいいいですね。といったただですが…どこに気になる要素がありましたか？」

「ええと、なんかツツコみたいところが増えた気がするんだけど。そんなことより生きていたころの記憶って…私は死んでいるとでも言いたいわけ？」

「はい。そのとおりです」

あっさりとしてそれこそさつきよりも機械的に「死んでいる」ということを肯定された気がする。でも死後の世界ってことは…

「この世界ではもう死なないってk「はい」え？」

遊佐さんは人の話を聞く気はないのだろうか？　ということはずき見た光景は夢ではなくて、私が生きていたところに体験した……と？　そっか、両親がいない間に強盗が入ってきたときの……

「どうしました、ゆりっぺさん？」

「遊佐さんあと一つだけ聞いてもいいかしら」「はい」……

「こほん。この世界では死なないということは……理不尽な神に抗えるということなのかしら？」

「神というものが存在するならば抗うこともできると思いますが、そんなことを考えるのはゆりっぺさんが初めてですね」

「私が初めて？　って言うことはこの世界に来た人は前にもいたっていうこと？」

「はい。ただ今までにこの世界に来た人はこの世界で、生きているときにできなかったこと、遣り残したことをこなし満たされて消えていきましたが」

「え？　消えていくって……どういうこと」「言葉通りの意味です。この世界から存在そのものが消えてしまいます。もともとこの世界は生きているときに未練を残したまま死んだ人が来る世界なので」　「なんで私の話をさえぎるのよっ！」

「そうだ、私は生きているとき、守るべきものをたつた三十分ですべて失った。それから私は私の妹や弟に理不尽な死を与えた神を憎んだんだ。これはチャンスじゃないのかしら？　あのとき理不尽な運命を押し付けた神に対する復讐をする。」

「遊佐さん、私が今から『神に抗うための戦線』を作ると言い出したらあなたは…仲間になってくれるかしら？」

「はい。よろこんで」

こうして私は「神に抗う」という私自身の目的のためだけに死後の世界で戦線を作り上げた。

d e t e r m i n a t i o n (前書き)

時間はかかりましたが第二話です。

この回からタイトルをアニメに沿ってやっていきたいと思えます。
まあ語彙が乏しいので、どこまで続くかわかりませんが。

d e t e r m i n a t i o n

死後の世界でも戦争をする。しかも相手は人間じゃない。……神だ。神なんてものが実在するかは眉唾ものだけれど少なくとも私はその存在を信じている。崇拜の対象としてではなく、戦うべき敵として。だから私は…この世界で神に抗う。汚くても、はいつくばつても、どんなに後ろ指を指されても私は抗い続ける。私はこの世界でそう決心した。

E p i s o d e 2 d e t e r m i n a t i o n

この世界の学生の大多数は、意思だけは持つているただの作られた存在なのだという。わかりやすく言うのならゲームの世界で言うところの村人A、俗に言うNPCというところか。ただ違うところは、テンプレートな決められた言葉を返すだけではなく、普通に会話が成立するし、ごく一般的な感性も持ち合わせているということだけ。

ごく少数の私や遊佐さんみたいな学生もちろん存在する。こちらには作られた存在などではなく、人生という物語の主人公となりうるべき存在。ただ私たちにも大きく分けて二種類のタイプが存在するらしい。一つは私みたいに「記憶を持って来る人」もう一つが遊佐さんみたいに「記憶を持ってこない人」この二種類だ。これは死んだときの死に方に関係するらしい。

死に方。例えば交通事故とかで頭がなくなった場合は記憶がない場合が多いらしい。それ以外は大体が死んだ時の状況、死に方まで記憶に残ることになるらしい。この世界では私たちは死なない。まあ当然といえば当然なのだろう。すでに一度死んでいるんだし。た

とえ死ぬような傷を負っても放っておけば自然と治るらしい。

そしておそらく、この世界でNPC以外の私たちのような人たちにとつて一番重要なことは「ある条件を満たせばこの世界から消えていける」こと。いいかえれば、神によって消されるということ。神にさえ抗わなければこの世界から消えていけるらしい。消えるといつても普段使うような意味ではなく、元の世界に戻れるということだ。…どんな姿で戻れるかはわからないが。魂なんて人間だけに宿るものではないのだから。

というのもすべて遊佐さんから聞いたこと。むしろ遊佐さんがどうしてこんなにこの世界に仕組みを知っているのかすごく気になるけど、遊佐さんは教えてくれなかった。

「とりあえず神と戦うための組織とはいえ、戦線の名前もなければ戦うための武器もない。ましてや私と遊佐さん二人だけだし…とにかく仲間を集めな」ドサツ」…」

と私がさつき遊佐さんから聞いたこの世界の情報を反芻^{はんすう}し、独り言を呟きながら学校の中庭を歩いていると後ろで人が倒れていた。

（ええーちよつと待ってよ。NPCも倒れることってあるの！？でももしNPCじゃなかったら助けたことを口実に戦線に入ってもらえるかもしれない…よし。そうと決まれば）

「だっ、大丈夫ですか？生きてますか？記憶はありますか？もしかして死んです？ってこの世界で生きているかとか死んでるとかってないじゃない！でもまあこのまま放置してわけにもいかないだろうからとりあえず保健室に連れて行きますか」

とりあえず倒れている人を保健室まで連れて行こうとした。けれど、よくよく見たら男子生徒だ。

「って運べるかー！ 明らかに無理じゃない。体格差がありすぎるわよ。しょうがないからここで目を覚ますまで待つてよ。いろいろ考えたいこともあるし」

どれぐらいの時間がたったのだろう。ひどく長かったような気がする。授業の始まりと終わりを知らせるチャイムの音ももう鳴らない。どころか、徐々に落ちていく夕日によって世界が赤く染まっていた。

「はあ…この世界に来て早々授業にまったくでないなんて…私はとんだ不良生徒ね。それにしても起きないわね。一発殴れば起きるかしら」

と、とりあえず一発殴ろうと拳を振りかざしたら…

「はっ…ここは？ なんで俺はこんなところで寝ているんだ？ まったく何も思い出せない」

起きた。これ以上ないベストなタイミングで。いかにも寝たふりで話を全部聞いてましたよ的なタイミングで目を覚ました。とりあえず横で混乱されてもウザいだけなので、私は真実を教えることにした。

「目は覚めた？ ようこそ。死んだ後の世界へ。早速だけどあなた戦線に入隊してくれないかしら？ 私を含めてまだ二人しかいないから入隊してくれると助かるんだけど。あ、そうそう戦線の名前も

考えといて。まだ決まってるのよね」

「死んだ後の世界？ 戦線？ あんたは何を言ってるんだ？」

「何をつて…そのままのことよ。あなたは元の世界で死んだの。で、その世界で遣り残したことがあるからこの世界に来たわけ。順応性を高めなさい？ そしてあるがままを受け止めるの」

「じゃあ戦線つてのは？」

「そのまんまよ。この世界で戦うための組織よ。まあまだメンバーは二人しかいなし、名前もまだ決まってるないけど。あんたも考えときなさいよ」

「なにと戦っているんだ？」

「そりや神様に決まってるじゃない」

「本当に神なんてものがこの世界は存在するのか？ そして神を倒して何をするんだ？」

「いる。と私は信じているわ。運命というもので私たちのことを翻弄し、慌てふためくさまを見物している性悪な神様が。そして神を倒してこの世界を手に入れるの。あなただってそうでしょ？ あなたは記憶がないのかも知れないけど、元の世界で不意な死を遂げていることは確かなこと。あなたの記憶を取り戻すためにも一緒に戦って欲しいの」

「俺の記憶を取り戻す…そんなことができるのか？」

「できるかどうかなんてやってみなきゃわからないじゃない。それともあなたは抗いもせず消される道を選ぶの？ 人間に生まれ変わるなんて保証はないのよ？ それでどうするの？ 戦線に入る？ それとも消える？」

「……………OKわかった。戦線に入るよ。であんたの名前は？」

「私の名前はゆり。中村ゆりよ。この戦線のリーダーよ。あなたの名前は？」

「俺の名前は…北……北大路…」

「下は？」

「思い出せ…ない」

「まあ記憶を取り戻していくにつれて思い出していくでしょ。じゃあ改めてよろしく」

と私は手を伸ばした。そして彼は少しためらいながらも私と握手をした。

d e t e r m i n a t i o n (後書き)

長かった。やっとオリキャラを出すことができました。

不定期更新ですが年内はあと一つくらいかければいいなと思っています。

e x i s t e n c e (前書き)

第三話です。

というわけで、お楽しみください。

e x i s t e n c e

とある病院の一室。ここで今まさに息を引き取ろうとしている一人の少女がいた。彼女は生まれつき心臓が弱く、十歳のとき余命一年と宣告された。だが、偶然起こった大規模な列車事故で仮死状態のまま死亡した少年の心臓を移植された。だが…長くは持たなかった。

彼女は自分が息を引き取る間際、弱りゆく自分の心臓の鼓動を聞きながらこんなことを考えていた。

（そっか…もう駄目なんだね私。せめてもう少しだけ生きていたかったな…学校にも行きたかったし、友達も…たくさん欲しかったな…この心臓をくれた人にもありがとうを言いたかったな…天国に行ったら、学校に行ったり、友達をたくさん作ったり…できるかなあ）

こうして、彼女は「この世界」で息を引き取った。そして……

……

E p i s o d e 3 e x i s t e n c e

「とりあえず、これで戦線のメンバーは三人か。もっと増やさなきゃって…聞いているの？あんなたち」

ここは教室の中。今のところここ意外に落ち着いて話せるところがないからここで話してはいるんだけど…流石に騒がしい。

「まずは戦線のメンバー集めよりも、落ち着いて話せる場所探しか

「…「ゆりっぺさん、とりあえず一般生徒が近寄らない落ち着いて話せる場所があるのですが？」…って早くそれを言いなさいよ！」

「いえ、なんかゆりっぺさんが悩んでいるのがとても面白く見えたので、あえて放っておいたのですが…」

「遊佐さんって何気に性格悪いん…」「ありがとうございます」ってほめてないわよっ！とにかく、その場所とやらの案内してくれない？」

三分後、私たちは（といっても私と北大路君しかないのだけれど）遊佐さんに案内された場所を見て驚いた。

「校長室かよっ！」

「校長先生は？ この学校にはいないのかよ」

「いえ、いますが彼は校長室よりも職員室のほうが好きみたいで、いつも職員室にいます。」

「まあいいわよ。どこでも。落ち着いて話すことに使えるのなら。で、なにw…」

ピンポンパンポーン

ただいまより緊急の全校集会を行います。

生徒の皆さんは、速やかに体育館へ集合してください。繰り返します……

「ますます元の世界の普通の学校みたいだな。全校集会まであるの

「かよ…どうするんだ？」

「とにかく行ってみましょう。話すのはそれからでも遅くはないわ」

体育館。この学校の規模に相応しく作られたこの場所は、校長室から反対の場所であり、私たちがついたときには全校生徒が整然と列を成していた。とりあえず私たちは自分のクラスの列がどこなのかさっぱりわからなかったので、後ろのほうで話を聞くことにした。

「では、校長先生のお話です」

「えー、この学校には生徒会長が長らく不在でした。そのため、生徒会自体存在しませんでした。ですが、今回の職員会議で生徒会長と生徒会の発足が決定されました。新たな生徒会長は橘奏さん、そして生徒会長補佐は直井文人君です。では、挨拶を」

「皆さん、初めまして。このたび生徒会長に就任しました橘奏です。よろしく願いいたします」

「生徒会長補佐に就任した直井文人です。よろしく願いします」

「では、以上で全校集会を終わります。各クラスに戻ってホームルームの準備をしてください」

「私たちには関係ないわねって…どうしたの遊佐さん。なんか考えているようだけど」

「いえ、何でもありません。私たちも校長室へ戻りましょう。この世界についてまだ話していないこともありますし、北大路君にも話さなければいけませんので」

私たちは体育館へ来たときと同じ道をとおり、校長室へ戻った。
そこで遊佐さんからこの世界の仕組みを改めて聞いた。

NPCのこと、記憶のこと、元の世界に戻ること……この辺は主にまだこの世界に来たばかりである北大路君向けの説明。私が初めて聞いた情報といえば、製造法さえ知識として知っていれば、土くれからでも武器が作れることと、NPCと元の世界から来ている人の見分け方。これですべてらしい。

ちなみに、NPCと人の見分け方は大きく分けて二つあるらしくて、一つ目は、一度殺してみることに。NPCは消滅するだけだが、人であればまた生き返るから。二つ目は、名前を記憶しているかどうか。これは北大路君みたいに生前の記憶がなくても、苗字だけで記憶しているのだという。

「じゃあ、この学校の中にはまだ私たちみたいな人もいるってこと？」
「」

「と、私は前回ゆりっぺさんに話したはずでしたが。もう忘れたのですか」

「わるかったわね。ってそんなことより、戦線の名前を決めましょう。勧誘するのに名前がないのは格好がつかないじゃない。それになにかいい案はないの？」
「」

「死んだ世界戦線。縮めてSSSでいいんじゃないか？」
「」

「なんかそれ、横文字だとカッコいいけど……まあいいわ。他にいい案も浮かばないし、当分はそれで行きましょう。そうと決まれば、

明日から勧誘するわよ」

このときまで、私と北大路君はこの勧誘がうまくいく、そして同じ志を持つ戦線の仲間が増える、この世界でなら、誰にも邪魔をされないと思っていた。だけど…この世界でもそんなことが上手いくはずもなかった。

e x i s t e n c e (後書き)

ついに、天使が登場しました。アニメで最初から名前を知っているようなことを言っていましたので、あえて紹介する形にしました。

次回はついにあの人が暗躍します。

secret maneuvers

「会長、少しお話があります」

私は生徒会長になった翌日、生徒会室の前で会長補佐の直井君に声をかけられた。私は彼の言うがままに生徒会室の中へ入った。白い壁、リノリウムの床、カーテンで覆われた窓。まるで病室のような部屋の真ん中に、一つの長机と二脚のパイプ椅子が置いてあるだけの部屋。でも…

「直井君、昨日はもつと立派な机と椅子があつたと思うのだけれど？ それにカーテンも…」

私は昨日見た光景と、今見ている光景の違いを口にした。だけど、彼はそれを遮る様にして言った。

「会長、椅子に座っていただけませんか？ それに、この部屋の違いなどもうどうでもいいのです。なぜなら、あなたはこの部屋に入らずともよくなるのですから」

「それは…どういうこと？」

「こういうことです、会長。いいですか、僕の目をじっと見てください。そして、目を閉じるんです。あなたは今から夢を見続ける。あなたは天使なんだ。生徒会長であると同時に、この世界で迷い続ける哀れな人間に引導を渡す - 元の世界へ返す役目を負う。いわば…神の代行者なんです」

私は、この世界で特別な役目を与えられた。今ではもう思い出す

こともできない大事な何かを失う代わりに…

Episode 4 secret maneuvers

校長室。昨日の全校集会の前に、遊佐さんの案内によって俺たち「死んだ世界戦線」の活動場所となった場所。実はこの部屋、プロジェクターがあったり、来客用の席、校長の趣味なのか大小さまざまな刀剣類が置いてあったりと、活動の拠点とするにはもってこいの場所だったりする。といっても、戦線のメンバーはまだ三人しかない。たった三人で使うにはもったいないことこの上ない部屋だ。とか考えていると、我らが戦線のリーダーが戻ってきた。

「北大路君、もういるの？ 相変わらず早いわね。リーダーより先に来るとは、なかなかいい心がけよ」

「で、ゆりはどうしてそんなに上機嫌なんだ？」

「よくぞ聞いたわ。実はねえ… って私の服装を見て気づかないの？」

ゆりの服装？ そういやなんか一般生徒とは違う制服のような…

「ってどうしたんだその制服？ まさか、ぬ…」そんなわけないじゃない！！「だよな」。で、本当にどうしたんだその制服？」

「これね、作ったのよ。ほら昨日遊佐さんが『作り方さえ知識として知っていれば、何でも作れる』って言ってたでしょ？ だからね、新しく制服を作ってみたのよ。いつまでも一般生徒と同じ制服じゃ仲間ができたときわかりにくいでしょ？ はい、これ北大路君の分」

と言いながら、ゆりは俺に新しい制服を手渡してきた。

「ほらっ、何をぼけつと突っ立てるのよ。早く着替えてらっしゃい。男子のがどんなのか見てみたいんだから」

十分後、俺は校長室から手近な更衣室で着替えを済ませ、校長室へ戻った。そこには、ベレー帽らしき帽子をかぶり、本来校長が座るべき椅子に陣取っているゆりの姿があった。つか、なんか校長室自体も暗くなってるし、プロジェクターが作動してるし…といういろあつけにとられていると、ゆりが声をかけてきた。

「うん、我ながらなかなかの出来ね。じゃあ北大路君、どこか手近な椅子に座って？ いまからオペレーションの説明をするわ。その名も、オペレーション『スカウティング』よ」

「は？ オペレーション？ つーかそのプロジェクターの画像はいつ作っただよ？」

「ああ、これ？ これは昨日遊佐さんが作ってくれたの。あの子ー見無表情だからわからないけど、結構ノリがいいわ。ちなみに、オペレーションも遊佐さんが考えたものだから。名前自体はあたしが決めてるんだけど。ちなみにこれは…「説明されなくてもわかる。どうせ戦線のメンバーを勧誘するってことだろ？」…そのとおりよ。じゃあ…オペレーション・スタート！」

こうして、俺たちにとって初めてとなるオペレーションがスタートした。実はゆりには人の大体の目星はついているらしい。そこで、最初に同じクラスで戦線へ取り込むハードルが低そうな日向君を昼休みに勧誘してみることにした。

「日向君、少し話があるんだけど…食堂まで来てくれない？」

「確か…中村ゆりさんとか言ったっけ？ 行くのはいいが、話って何だ？」

「食堂についてから話すわ。それと私のことは、ゆりって呼んでくれてかまわないわ。こっちの男の子は北大路君」

「おう。じゃあ食堂に行くかー」

と、あまりにも簡単に話がまとまってしまったので、二人で顔を見合わせたのだが、当の本人は先に行ってしまうので急いで後を追った。

「日向君、いきなりだけど入隊してくれないかしら？」

「なんだそれ？ 軍隊みたいなものか？ 面白そうだなあ。いいぜ入隊してやんよ！」

「そうよね。いきなりこんなお願い…っていいの！？」

「ああ、でも何をするんだ？ それだけは聞かせてくんねえか？」

「いいわ。この戦線の目的は…神に抗うこと。そして、この世界を手に入れるの。あなたも生前不幸な、恵まれない死に方をしたんでしょう？ その運命をもたらした神に抗おうってわけ」

「そう…だな。ってことは、ゆりも北大路もか？」

「ええそうよ。彼は記憶がないみたいなのだけね」

「そっか…じゃあ改めてよろしくな。ゆりっぺ。北大路」

「ああ。よろしく」

「なんかゆりっぺってしっくり来るわね…まあよろしく」

「じゃあ話も終わったんだし飯にするかー」

カラーン

話が終わり、三人で食券を買おうとしたときにそれは突然訪れた。最初は何か金属の物が床に落ちる音がした。そして、音のするほうを見て…俺たち三人は目を疑った。

人が消えていた。正確にいうなら、半透明になり、満たされたような表情を浮かべ…いなくなった。昼食らしき料理が四つあるところを見ると、最初は四人いたのだろう。だが今机に座っているのは…昨日全校集会で、生徒会長の就任が発表された橘奏一人だった。

呆然としていた俺たちに向かってゆりは、

「オペレーション中止。校長室に戻るわよ」

とだけ言い残し、走って行ってしまった。そして校長室に戻るやいなや、「遊佐さんが言っていたのはこういうことか」と呟きながら考え事を始めてしまった。その鬼気迫る表情に俺たちはただ…待つしかなかった。

s e c r e t m a n e u v e r s (後書き)

前書きは思い浮かばなかった…なにを書いてもネタバレにしかならなさそうでしたので。

今回は、ついに敵対勢力が出てきました。これで物語もますます面白く…できる自信はまったくありませんのであまり期待しないでください。

次回は確信って所でしょうか。

nightmare

私には、「感情」というものがないのだろう。誰が傷を負おうと、誰がいなくなろうと私には関係がない。むしろ、私にはその人がいなくても、怪我をしても…私にとつて、利益にもならないければ、害にもならない。なのに、大人たちは私に「悲しむ」ことを強要する。なぜ他人のために悲しまなければならぬのか…大して悲しくもないのに。

そういえば、私の周りからいなくなっていく人って、私が「いなくなつてほしい」と願った人ばかりだった。私には人を意のままに操れる。…そうか、私は神なんだ。神なら、神に相應しい世界を作り上げないと。この矛盾と欺瞞に満ち、不幸なもの、力のないものが虐げられる世界ではなく、そこに暮らすすべての人が、幸福に、争うことなく生活することのできる世界を。

こうして私は、新たな世界を創造するために…わざと元の世界に未練を残しながら、でもその未練さえを超える目的のために…自ら命を絶つた。

Episodes nightmare

唐突なオペレーションの中止から一夜明け、四人の戦線メンバーは校長室に集合していた。だが、校長室には重苦しい空気が立ち込めていた。それもそうだろう。いつもなら、「メンバーを探しに行くわよっ！」と真っ先に言い出すはずのゆりが黙り込んでいるのだから。

「日向君、北大路君、あなた達も見ていたわよね？」

「ああ。なんか生徒会長と楽しそうに会話していた女子生徒が、消えた…何の痕跡も残さず、煙のように」

「でもよお、どうして人を消すなんてことができるんだ？」

「あれは…神が使わした天使なんだわ。生徒会長という仮面をつけた…」

「ゆり、それはあまりにも飛躍しすぎていないか？」

「出現したタイミングは、私たちが戦線のメンバーを集め始めたとき。そして神は、この世界のどこかで私たちのことを見ている。とすれば、自分の手先を送り込んできても、なんら不自然ではないわ」

「じゃ、じゃあ、あの生徒会長を説得とか何かしらの方法で神の元へ案内させるのか？」

「そんな簡単に説得にに応じてくれるかしら？ 不用意に近づくと、消されるということもありうるわ。一番手っ取り早いのは…武力による…制圧よ。幸いこの世界では、作り方さえ知っていれば、土くれからでも武器が作れるらしいから、まずは作り方を知っている人から探しましょう」

「ちよつ、ちよつと待てゆり。それはいくらなんでも、強引過ぎないか？ 天使とはいえ、相手は丸腰の女の子一人だぞ？ それ…」

「そんなことは関係ないわ。私はこの世界を手に入れる。そのためなら、どんなに汚いことだって、どんなに後ろ指を指されようと…」

私は自分の意思を貫く。誰に邪魔をされても、越えられない様な壁が現れたって、私は… たった一人でも、味方がいなくてもこの世界を手に入れるために、戦う。北大路君、日向君、… あなた達は… どうするの？」

俺と日向が初めて聞いたゆりの決意。校長室を支配する沈黙。だが、その沈黙を唐突に破ったのは… 日向だった。

「ゆりっぺ、俺はまだ今日会ったばかりだ。その俺に戦うか逃げるかの選択を迫られても、決められねえよ。それに、女の子一人に戦わせるのは、なんというか… こう… と、とにかく俺は、なんと言われようと、どんなに迷惑がられようとついていくからな！」

「そう… それで北大路君は？」

「…………… わかった。日向だけにゆりを任せるのは少し不安だし「おいちよつと待て！ それはどういうことだ？」… どういうも何も… 言葉通りだが？ とにかく俺もついていくよ」

こうして、俺たちはこの世界を手に入れるため、神の代行たる「天使」という実体を持った「敵」を得、この戦線の目的のために、争いの中に身を投じた。そして、本当の意味で、「死んだ世界戦線」が出来上がった。… この動きを、会長補佐が把握しているとは知らずに。

- 女子寮・天使の部屋 -

普段は男子など入れるはずのないこの部屋に、生徒会長補佐・直井文人はいた。その目的は、会長が使用しているパソコンに、とあるプログラム - ANGEL PLAYER - をインストールするた

め。すでに、いくつかの基本的なものは製作済みで、後は戦線と戦わせることだけだった。

「では会長、基本的な使い方は先ほどお教えしたとおりです。余計な技能を足すと会長自身に不具合が生じますので、その点だけお気をつけください。では、これで」

「わかった。ありがとう」

こうして、天使と戦線との長い戦いのシナリオが完成した。

n i g h t m a r e (後書き)

今年初投稿です。

また細かいところは修正していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7762y/>

Angel Beats!

2012年1月9日02時48分発行